ホアンキエム湖近くに登場したマクドナルドのハノイ市第1号店（左端）

■フォトエッセイ■

# ベトナム
## ― 時の奔流の中で ―

写真・文　寺本　実
Minoru Teramoto

本号で休刊となる本誌は、1995年4月に創刊された。

1986年12月に開かれたベトナム共産党第6回党大会において、歴史過程に対する認識を見直し、市場経済的手法に基づく経済運営、国際分業参加の方向に舵を切ったベトナムにとっても、1995年とその後数カ年の動きは、今の流れに繋がる重要な意味を持った。

1991年10月にカンボジア問題に関するパリ和平協定が成立し、1978年12月のカンボジア侵攻以来続いたベトナムの孤立状態は溶解していった。1991年11月に中国との国家関係を正常化し、同年12月にソ連解体を目の当たりにした後、1992年7月には東南アジア諸国連合(ASEAN)のオブザーバー資格を得、経済関係を中心にアメリカとの関係改善が進んだ。そして、1995年7月にASEANへの加盟を果たし、アメリカとの外交関係正常化を達成する。世界貿易機関（WTO）に加盟申請をしたのも、1995年（1月）のことである。

国内では、1994年1月に開かれた任期中間党大会で、1991年6月の第7回党大会以降の順調な経済成長を背

巨大なロッテタワー。その手前にかつてJICA事務所も入居していたダエウのビジネスビル。左端がダエウホテル（ハノイ市内）

国営ベトナムテレビの新社屋（ハノイ市内）

ハノイ市内では中国の支援を受けて都市鉄道建設工事が進められている

景にして、「工業化・近代化」推進の方向性が示され、第8回党大会（1996年6月末～7月初め）でその方向性が引き継がれた。同党大会では2020年までに基本的に工業国になるとの目標が定められた。

2000年7月にはアメリカと通商協定を締結した。これを受けて、2001年11月に党政治局が国際経済参入に関する決議を出す。翌12月には同通商協定が発効し、ベトナムは本格的な国際経済参入の時期を迎えた。この流れは、約12年に及ぶ交渉期間を経て2007年1月にWTOへの加盟を果たしたことにより、さらに不可逆的な動きとなった。

このように、ベトナムの基本路線として今も続く「工業化・近代化」、「国際経済参入」路線の形成と展開は、本誌が誕生した1995年とそれ以降の時の流れと重なっている。

以上のような時代の奔流は、ベトナムの風景の変化に如実に反映されている。

古くからハノイ市民の憩いの場として有名なホアンキエム湖。同湖周辺のハンバーイ通り、ハンカイ通りを四つ角のひとつとする交差点付近には、多くのベトナム人、外国人に愛されてきたチャオカフェというおしゃれなカフェがあった。店を訪れる人達は、風味豊かなコーヒー、野趣あふれるジュース、個性的なケーキや料理などを楽しんできた。

しかし、2017年12月半ばに同地に行ってみると、チャオカフェの姿はなかった。代わりに、マクドナルドが開店していた。2014年にホーチミン市にベトナム第1号店を開店したマクドナルド。このハノイ市第1号店は2017年12月2日に開店したとのことだった。

交差点を隔てて斜め正面の建物の壁上部には、以前と変わらずホー・チ・ミン主席がラジオで抗米を呼びかけた「抗米救国檄文」（1966年7月17日）中の標語とともに、抗仏、抗日、抗米戦争を戦った同主席の絵が掛けられていた。

次に、ハノイ市キムマ通りにあるダエウホテルとそのビジネスビル。同ホテルはアメリカのクリントン大統領など多くの要人が宿泊した高級ホテルである。かつては周囲に目立った建物もなく、存在感が際立っていた。しかし、2014年9月にロッテタワーの建設工事

バルーン、おもちゃの行商人（ハノイ市内）

何度見ても写真を撮りたくなる「過重運搬」車。バイク前のカゴも利用している（ハノイ市内）

お菓子の行商人。他の通りで少し前までお客さんに取り囲まれていた（ハノイ市内）

再開発が進むハノイ市内でゴミを回収して回る人

操業を始めた年のズンクアット石油精製所（ベトナム中部クアンガイ省）

ホーチミン市人民委員会前の広場（グエンフエ歩道）。少し前までこの付近はグエンフエ通りとレロイ通りの三差路交差点だった

が竣工し、65階建て、高さ265メートル超のビルが背後に聳え立つ形になった。さらに、ダエウホテル前を走るキムマ通りとグエンチータイン跨道橋の交差点の向こう側には、国営ベトナムテレビの28階建て新社屋が2017年9月から活動を開始している。また、同市内では中国の支援により都市鉄道の建設が進められており、駅舎と思しき建築物が姿を見せ始めた。

中部では、1997年の後期国会で中部クアンガイ省に建設が決定されたベトナム初の石油精製所となるズンクアット石油精製所。長い紆余曲折を経て、2005年前期国会で可決された決議を受けて同年11月末に建設工事が本格化し、2009年2月に操業を開始した。

南部では、ホーチミン市中心のグエンフエ通り周辺の変化が著しい。日本の支援を受けて都市鉄道建設工事が開始される2014年7月までは、ただ広い道路が並んでいた。しかし、今では以前のグエンフエ通りの中央部とかつての同通りとレロイ通りの交差点付近を貫いて、広場（レロイ歩道）が作られている。広場の両脇に道路が流れ、背後にビルが林立する形となった。

ホーチミン市内ヴォヴァンタン通りにあるベトナムの人達がよく通う地元料理店。ライスペーパーに色とりどりの野菜や肉などを巻いて特製ダレにつけて食べる料理や米麺料理、チェーと呼ばれるベトナムのデザートなどが充実している。同店では、近年、ガラス戸が店の正面入口に設けられ、店員はレモン色で店名と住所番地がプリントされた群青色のユニフォームを着用するようになった。

変わらない風景もある。都市中心に巨大な建物が林立し、スーパー、ファーストフード店、コンビニなど、グローバルにビジネスを展開する企業の店舗がベトナムの都市に広がる時代に入っても、従来の生き方を続ける人達がいる。

昔ながらの素朴なお菓子やバルーン、おもちゃを自転車で売り歩く人、街中のゴミを回収して回る人、形状豊かな果物、野菜を路上で商いする人、山積みの荷をバイクに括り付けて運ぶ人達の姿もまだ目にすることができる。何よりも大都市周辺には依然として広大な農村地域が広がっている。

時代の奔流のなかで生き残るために、ベトナムの市井の人達は適応を迫られてきた。ベトナムの人達の逞しさを信じているが、何かを得れば何かを失うのがこの世のならい。「あの時にこうしていれば…」というようなことがないよう、1人1人が時代を冷静に見つめ、対処してもらえたらと願う。

再開発が進むグエンフエ通り周辺。ショッピングセンターが取り壊された（ホーチミン市内）

ホーチミン市グエンフエ通り。2010年に竣工したビテクスコフィナンシャルタワー（中央）が見える

グエンディンチィェウ通り。昔ながらのアパートと新築ビルが向かい合う（ホーチミン市内）

てらもと　みのる／アジア経済研究所　東南アジアⅡ研究グループ

ベトナム地域研究に従事。ベトナムの生活保障、社会、平和などに関心を持つ。

ホーチミン市内の地元料理店

チョロンのバスターミナル傍の路上市（ホーチミン市内）